

若者を取り込み若者と取り組む地域づくり

浜田市金城自治区 6 公民館連絡協議会

1 浜田市金城自治区の概要

金城自治区は市の東側に広がる中山間地域に位置し、総人口は4,415人、高齢化率37.8%、人口の約6割近くが雲城地域に集まっている。また、雲城、今福、波佐、小国、久佐、美又の6地区にそれぞれ公民館があり、個々には地域の特性に応じた事業を行いながら、ふるさと学習会、ふるさと再発見事業、新成人を祝う会、三偉人や広浜鉄道今福線ウォーキング大会などを6公民館連携して実施している。

小学校は3校、中学校1校あり、小学生は225人、中学生は105人である。

2 事業の趣旨

この事業に取り組んだ理由の一つは、地域の人を対象に実施したアンケート調査である。下記の5項目について記述式で行った。

調査項目は、「地域は何点ですか」「こうすれば地域が100点になると思うことは何ですか」「地域の好きなところは何ですか」「地域の中でもったいないと思うことは何ですか」「どんな地域になったらいいですか」とした。上位の答えとして、地域の好きなところは「自然、つながり、人柄、やさしさ」、地域の中でもったいないは「若い力、人を活かす、つながり、自然を活かす」、どんな地域になったらいいかは「つながりが深い、一人ひとりの役割発揮、就労、若者パワー」とあり、地域を人の共通の関心が高いキーワードは「自然、つながり、若者」ということが分かった。

また、以前から公民館事業に「若者」の参加が少ないことが課題となっており、「若者」を取り込む方法を考えていた。

そこで、既存の事業に若者の活用を地域課題解決型公民館支援事業として6公民館連携

で取り組むことにした。

若者にとって取り組み易く、魅力ある事業内容を考え、その事業の実行委員に若者が企画段階から参画して、運営できるしくみを作ることで、普段地域に関わる機会の少ない若者が、地域の人と「つながり」をもち、さらには他の事業を企画・運営していこうとする気運が高まることをめざすこととした。

また、金城自治区の6公民館がそれぞれの公民館の特色を生かしながら、連携して行うことで、金城自治区の若者が集う場が増え、「つながり」がさらに広がることも考えた。

3 具体的な取組内容

(1) ハッチョウトンボを活用した ESD 学習

絶滅危惧種Ⅱ類に指定されているハッチョウトンボの観察学習会を通じて人と自然とのつながりに気づき、持続可能な環境について考え、トンボを守る活動までつなげることをねらいとして、雲城公民館を中心に取り組んだものである。

ハッチョウトンボは、地元の耕作放棄地で発見され、地元住民による『ハッチョウトンボを守る会』が発足、生息地の保全活動が始められた。また、浜田高校の自然科学部による研究成果発表が報道され関心が高まってきた。

今年度は、ESD 学習をさらに地域住民に広げるため、公民館、ハッチョウトンボを守る会、雲城まちづくり委員会、小中高等学校関係者、浜田市環境課、ひろしまNPOセンター、しまね自然と環境財団が企画会議を開催して年間計画について協議した。

企画会議では、四国のトンボ王国から杉村先生をお招きして大規模な観察・学習会

と講演会、浜田高校自然科学部による小学生の指導、他生息地域の視察、さらにトンボの保全活動を実施することを話し合い、実施した。その結果、保育園児、小学生、児童クラブ、高校生、親世代など、多くの若者世代を取り込むことが出来た。



約2cmの大きさの鮮やかな赤色のオス



トンボ王国 杉村先生の指導

ハッチョウトンボはまさに妖精である。子どもから高齢者まで、一度観たら決して忘れない、引きつける力がある。高校生と中学生・小学生をつなげ、絶滅から守ろうとする気運が高まりつつある。人々に地球環境を守らねばというメッセージを発信する力がある。

2月下旬、ハッチョウトンボ生息地の保全活動を実施した。公民館、まちづくり委員会、ハッチョウトンボを守る会が呼びかけたところ、草刈機、掻き、集積袋など持ち集まった人は、小学生、高校生、親世代、高齢者まで30人以上だった。

これからもハッチョウトンボを通じたESD学習を進めていくこととしている。

(2) ふれあい交流会～自然を満喫しよう～

金城自治区内で最も高齢化率が高い小国地区は、小学校閉校に伴い、ほとんど子どもの声を聞くことがなくなっていた。そこで、10年前から地域住民と子ども達の「ふれあいの日」をスタートさせ、地域住民に元気を取り戻そうと実施してきている。

今年度の実施にあたり、実行委員に若者の参画を呼び掛け、若者の意見を取り入れながら協議を重ねた結果、親子キャンプと川の生き物観察、川遊びを一泊二日で実施することになった。

連携事業として実施することで他公民館などの協力もあり、例年の参加者を大きく上回り、大盛況となった。

小国の自然を活かした親子の体験活動を通して、最も高齢化率が高い地域でも地域全体で子どもを育む気運が上がった。また、若者が本事業をきっかけに地域に積極的に参画するようになったことで、地域住民のやる気や元気が戻ったことが事業の成果として挙げられた。

親子キャンプでは、まずテント張りに挑戦するも、お母さん方ではなかなか難しく若者の手を借り今夜の寝床が完成した。次に飯ごう炊飯、初めての味に舌鼓する参加者。親子にとって初体験の連続で、子ども達の弾むような声が聞こえてきた。

川の生き物観察では、地域住民が親子を歓迎し、活動の様子を暖かく見守った。



飯ごう炊飯をする親子



川の生き物観察をする親子

川遊びは、「ちょっと怖いけど楽しい」子供達の歓声が止むことはなかった。

金城自治区内でも川遊びができる自然が残っている地域が少なくなっている。

夏休みに入った初めての日曜日を小国の川の生き物観察、川遊びでスタートした親子は、全員で112人（大人48人、中学生3人、小学生47人、幼児14人）で大賑わいだった。



タイヤボートで川下り

小国の自然の豊かさを活用したことで親子が喜んでくれ、地域全体で子供を育む意識づくりにつながった。若者が積極的に参加したことも地域住民のやる気と元気を取り戻す引き金になり、高齢者から来年の計画のアイデアが出てきた。

(3) ふるさと遊楽校

久佐地区も小学校の閉校に伴い、ふるさとの良さを知らない子どもや若者が多いという現状課題の解決に向けて、地域と若者を結びつける事業に取り組んだ。

若者の意識調査の結果や実行委員の若者の提案により、親子で参加する農業体験、

案山子作り、地域探検など体験活動を中心に実施した。

農業体験では、Iターンの方の畑でとうもろこしの収穫体験に参加した。



とうもろこしの収穫体験をする親子

親子とも初体験だったが、親切で丁寧な指導の下、もぎたてのとうもろこしを試食し、その甘さに驚いていた。

夏休みには親子で案山子作りにもチャレンジした。どんな案山子を作るか、親子で考え、古着などの材料を持ち寄った。どう作るのか模索しながら何とか完成し、通学道沿いに立てた案山子は1ヶ月間、地域の子どもを見守った。



完成した案山子と一緒に記念写真

11月に実施した親子地域探検では、あけび等の秋の恵みを楽しみながらウォーキングし、ふるさとの豊かさを知ることができた。

遊楽校では、さらにフィールドを広げて、雲城のハッチョウトンボ観察会や小国のふれあい交流会にも積極的に参加し、体験と交流を図った。

事業の成果として、新たな人材の掘起こしが出来たことで、まちづくりへとつ

なげる人づくりの土台作りとなったこと、
今までで知らなかった地域の魅力を発見
できたことも大きな成果である。

さらに充実させ継続していきたい。

(4) 金城自治区新成人を祝う会

金城自治区で育った新成人を地域の人
がお祝いしようと金城自治区の6公民館、
新成人、保護者、まちづくり委員会、自
治会、行政が連携して実行委員会を立ち
上げ、1月4日に開催した。

企画段階から新成人と保護者、昨年
の新成人の若者が参画し、心に残る祝う会
にしようとする自由な発想で活発な意見が出
された。

「ふるさとで育った新成人を地域でお
祝いしたい気持ちが一番である」が、若
者に地域の現状・課題・まちづくりの取
り組みを紹介したいことなども伝えた。

20歳の記念の冊子作りをすることに
なり、これは新成人が担当した。地元
にいる、同級生で集まり、原稿依頼をメー
ルで送り、遠方の同級生とも連絡を取り
あった。

完成した冊子には親やふるさとへの感
謝の気持ちなどが書かれてあり、新成人
の思いを知ることができた。

保護者は、新成人が赤ちゃんの時から
現在までの写真を映像化して「なつかし
の映像」を作製したいと編集会議を何回
も開催した。

当日の受付係は、保護者が行い、成人
の近況報告の司会は新成人自身が担当
し、和やかな雰囲気ですすめられた。

また、まちづくり委員会の取り組み
を新成人や保護者に紹介した際には、少
子高齢化の中で地域の課題解決にむけ
て頑張っているふるさとへ若者の力、知
恵を貸してほしいと呼びかけた。



近況報告をする新成人

今後は、本事業で終わることなく新成人
を地域デビューに繋げる仕掛けが必要と
感じながらも、まずは継続的に実施するた
めの体制作りと決まった資金の確保が肝
要である。

4 評価と成果

一見異質に思われる4事業は、若者を取り
込むことで繋がっている。若者の地域参画を
めざして実施をした事業をとおして、現在の
地域課題と将来の金城に希望を描くことがで
きたと考える。

5 今後の課題と見通し

6公民館が、地域（まちづくり委員会、自
治会、学校、行政等）と協同して、子どもか
ら大人までふるさとへの愛着と誇りを持てる
ような「ふるさと学習」を実施し、人づくり
から地域づくりへとつなげていけるという仕
組みが大切である。すでに6公民館が連携し
て実施しているものに加えて、親子で取り組
むふるさと探検（仮称）を、今後自治区全体
で実施できるよう強化していく必要があると
考えている。

ふるさとを愛する心を育てるこのような
取り組みを今後も積極的に実施していくこと
が、若者の定住促進につながると考えている。

（文責：主事 嶺田澄江）